



目次

◇研究

渡鮮一年有半

◇文苑

五年の後に  
人の道  
察舎日記

幸田氏の全  
氣念たよ  
クテ

◇雜報

學校便り  
校友會便り  
其他

大正七年四月廿五日發行 第百貳號 每五廿月每定 日行發期定 日五廿月每定 日行發期定 日五廿月每定 日行發期定

研究

渡鮮一年有半 (承前)

國境にて 坂本光太郎

何んば結氷期でも月日の小車は滞みなく廻轉して、茲に一陽來復門に大正五年の松飾を見しも夢の間三百六十五日の昔となり今朝はニイヤの煮て出して、呉れた一碗の難煮と一盞の屠蘇に酔ひを購ひ新領土に於ける第一の新春を迎へた。

△氷上運動會

鴨綠江の結氷は兼ねてより聞いて居たが初めてそれを見た時は其の結氷状態の意外に素晴しいのに驚くより外はなかつた、船に代つて多くの支那船が通行する、此の橋の下には鐵が打ち付けてあり後方に一人のニイヤが立ち、スキーに使用する様な棒を股の間より突張りつゝ走らするのである。スケート場を設けて氷上運動會を二月十一日紀元節の佳辰を卜して安東縣稅關前に於て催され、奉天撫順遼陽龍山等の遠方より撰手が出かけて來て優勝旗の奪ひ合ひ、可愛らしい小學兒童が大きなリボンを纏しつゝ、紅や紫の袴の裾を蹴つて、勇壯活潑に滑走する有様は信州諏訪湖以外にはあまり見られぬ光景であるが、支那人、朝鮮人、内地人其他西洋人の來觀者が黒山をなして周圍を取捲きやんやと拍手喝采する様は到底諏訪湖と雖も見る能はざる事と思ふ。三月上旬は採氷期にて毎日ダイナマイトの音が絶

わない、下旬には氣候稍温暖となり鴨綠江の結氷も全く解氷してジャンクが通ふ頃となる空には毎日雁が飛んで居る……

△病魔の手に

自四月十一日至八月一日咸鏡南道甲山郡及三水郡へ出張を命せられ、區分調査専門二組施業案調査一組が四分班となり(一班人員内地人三名通譯一名宛)十一日夕新義州を發して、南下し京城經由元山港にて十三日午後九時江原丸に乗り込み翌朝になり何處迄來たらうと甲板に立つて見渡せば、こは如何に元山港であつた、午前八時頃出帆一晝夜波荒き日本海上に漂ひ、新昌に上陸したのであつたが上陸の際には流石の吾輩もヘトヘトになつてしまつた。翌日より毎日約七里の行程を以て進み十九日豊山に着いた、夜は積雪五寸に及び雪解けの爲め鷹徳嶺を越ゆる時の如き困難の様は筆舌に盡し難い、毎晩豆の療治に苦しみ一週間に於て根據地なる甲山郡同仁面の合井浦里といふ一小部落へ着いたが此處はまだ雪と氷とでござされて居て何時青い山となるや知れず、到着早々肛門の左に饅頭大の腫物が生じ其痛みははん方なく歩行することも、坐ることも出來ず頭痛は激しく悪感さへ覺わした、さりとて附近には醫者もなく惠山鎮に藪醫者の居ることを聞ければ、繩にて鐙を作り兩脚をピンと踏張りて駄馬に跨り鞍に兩手をつかへて尻を浮かし惠山鎮に向つて合井浦里を出發したが此間七里にして大小

時は三つある上りは兎も角下りて来ては如何ともすること能はず、或は後向に或は鞍を腹に當て馬の脊と十字字となりしてやうく日の暮るゝ頃惠山鎮に出た。翌朝醫師に切開して貰ひ軟膏を張つて居る中四五日に癒つてしまつた。惠山鎮には守備隊あり憲兵分隊あり營林支隊あり内地人も澤山住居してゐる、鴨綠江を隔て、支那の長白府と相對してゐる。長白は太正四年九月十三日頃迄の間は馬賊の出る時で此の人々は戦々恟々たりであつた。

△山中の生活

五月も半ばは過ぎて衣更の六月も来るのに此處はまだ雪や寒が頻りに降つて居て、新緑滴らんとする形容詞はまだ少し早い、豫定通り合井事業區の調査も了へ六月には三水郡別東面へ移轉し雲柱峯事業區の調査に着手した。氣候の變化が急劇なので安間嶺を越す時に目に入つた、あやめの如きは全部莖の長さ僅かに二三寸にして花が開いて居るのも滑稽であつた、十一月下旬から三月の末までは河は結氷してをるから谷川畑等の區別なく自由に此上を人畜は往來するので夏の旅行よりも、冬の旅行が遙かに樂で近道であるぞうだ、牛の糞を引くことは實に盛なもので總ての運搬は此である。寒氣酷烈なることは世の既に定評あることで今更物珍らしく言ふ迄もないが、零下三十度迄の寒氣は此邊では普通の寒さとして決して驚かないぞうである。大正四年正月

は零下四十二度迄降つて此時は眞に寒さを感じた、とは此邊の人々の言ふ處であつたが、一寸内地に居る人などは夢にも想像のつかぬ處である。本年一月八日陸軍始めの觀兵式は二重橋前で行はれたが、此日東京は零下五度迄の寒さで往來の人々は異口同音に外套も着ない軍人に同情したのであるが此の邊の寒さを聞いたらごんなであらう恐らく信用せぬ事と思ふ。

『鴨綠江筏節』

『朝鮮と支那と境のアン鴨綠江ヨイシヨイ流す乗夫はコリヤヤけれど雪や氷によアリヤ張りつめられてよ明日も亦ヨイノ、高嶺に着きかねるチヨイノ』此の通り氣候は非常に低いのであるが物價は非常に高い左に惠山鎮に於ける物價の二三を擧げて見よう。白米一升三十五錢、醬油一升六十五錢、味噌一貫目一圓二拾錢、砂糖二斤卅五錢、サイダー一本卅五錢、ビール一本七十錢、葡萄酒一本九拾錢、ミルク一罐五十錢、煮干一貫目二圓四拾錢、素麵一貫目一圓八拾錢、切麩百目四拾五錢、大根切千目十五錢、メリケン粉一貫目七拾錢、(古新聞紙二貫目八十錢)以上は主に食料であるが此外すべてが、此比例である。物價暴騰の今日に於ては定めし此二三割は騰貴して居る事と思ふ、只安いと感ずるは鶏が一羽二拾錢乃至三十錢卵が一ヶ一錢位の處である。

△安正式の單騎旅行

癒つたばかり思つて居た尻の腫物は再發し來り再び惠山鎮に出で此處は守備隊の軍醫の診察を受けしに「肛門膿瘍」と診斷され手術を要するとの事にて切開して、洗つて貰ひ七月二日歸途に就いたが福島安正式の單騎旅行はあまりに淋しかつた。仲坪場にて牛より馬に乗り替へ港迄五日にて到着する約束で來たが數多ある時の中に鳥居峠の一倍もある厚峠がある、此れを越ゆる時は麓より濃霧にて一寸先も見えず服はビッシヨリ濡れてしまひマツクレは霧の爲めに眼を患ひ、加之駄馬は妊娠中ときて約束より一日遅れ北青に着いた時は此處にて暇を呉れといはれ詮方なく馬を備ひ替へ翌日新浦港へ着いた。

北新へついた日は、丁度此の處の市日で大混雜、朝鮮人で往來が埋つてゐた、少し大きな部落へ行くといつて一月に二回市日が定まつてゐて、この日には三四里附近の田舎より穀物、麻、麻布等の物を運び來たり布或は其他必要品と交換して歸るのであるこの如く朝鮮は未だ物品交換が行はれて居るのだから、錢はなくても此所では生活が出来る、途中或晩の如きはアンペラも敷いてないオンドルの上に、内地人は自分一人の外に支那人一名マリックン(馬夫)九名とヨボの夫婦達と都合十三名が同宿して、馬鈴薯で一夜を明し朝飯を食はずに早々出發して午後二時頃途中で朝鮮蕎麥を腹三杯詰めて

こんな事も有つた。馬脊一里茶屋なき高麗之旅。

『鴨綠江筏節』

『ヨボチビに疲れし身をば飯盒枕ヨイシヨ、丁毛布被りてアリヤやすやすと妻子に逢ふたるまアノ夢の中を憎くや又ヨイノ、眼覺すビシデ君チヨイノ』『高麗の地に一年送りしきのふけふ薄らに解りしヨボ(鮮人)の言の葉』昨今は多少朝鮮語を操れる様になつたが、未だ未だ複雑な事は解らない、只單語と單語を日本語の接續詞で繋ぎ合はして、即ち朝鮮同盟の言葉で手真似を以て其の及ばざる所を補ふので有る。喋べれる立派な口を持って居ながら啞者に等しき動作をしなければならぬとは言葉の通はぬ事程苦痛な事はない。

△山嶺の都見物

新浦にて汽船成鏡丸に乗り込んだが、各等乗員で己むを得ず赤切符を買はされ甲板上に蝙蝠傘をさしかけて居た。正午に西湖津へついた、此所で鑛石を積み込むため四時頃迄淀泊するといふ事であつたが、積みたくれたため夜の九時に至り出帆した、ボートのすゝめに依り三等室のヨボの間へこせ込んでねたが、肴のくさいのとヨボ臭いのと暑苦しいのとで心地よくもねられず、翌午前三時元山に上陸して文明の空氣を吸ふ事が出来、初めて人間になつた様な心持がした。朝の九時四十分發の列車にて京城に運ばれ

た。驛前より電車にうちものり、東北へ數丁行くと三百年來巍然として聳てゐる南大門が有る、幼少の時小學校で龍宮城の繪より外に見た事のない支那風の樓門にして、宏壯華麗丹碧燦爛たるものにして、六尺有餘の大男加藤清正が三尺の長鳥帽子を被つて、春風に美髯を吹かせつゝ馬蹄軽く今の電車通も鐘路へ打たせた時如何に威風凛々たるものであつたらう。

京城は朝鮮一の大都會と唱へられて居るが人口僅かに二十萬、内地人は三萬を超へて南山の麓に沿ふて走る日本町通りは、純日本町にて百貨の店軒を連ねて日本生活に何一つ不自由なものはない、通行の男女の服装は概して贅澤ではげばして、襦袢をさげ、勞働者らしきものは絶て見ないのは内地に類がない。

水源は京城を隔る二十餘哩の南方にあり、京畿道觀察府及び本年を以て二十週年に達する朝鮮總督府農林學校が有る、主として鮮人を教育し來りしが本年度よりは、學制を改革して高等教育を施し内地人の入學も許したさうである。

雨の京城に名残りを止めて北上し午後三時平壤についた、朝鮮第二の都會で、人口四五萬都として古戰場としても名高い。兼ねてより一度此の地に遊び舊跡を探りたかと思つてゐた、折柄之を幸に早速下車し腕車を驅つて先づ第一に玄武門に向つた。小西行長、大島義昌、原田重吉の名が我々

の記憶に止つてゐる。

この地は朝鮮に在つては珍しい大平野の中に在つて天險と水利とを兼ねたる平壤は、天晴王城の地である、水碧き大同江に臨んで數丁の間は岩壁水に迫り、牡丹台、乙密治などの丘陵が聳れ、附近には老松參差として枝を交へて居る具合は、風景絶佳要害堅固と見ゆるもの此の要害は笑止にも落城の歴史に富む。

乙密治の柱は我彈丸の爲め蜂集の如く、又彼の原田重吉氏がのり越わしときく玄武門は其の下に有り、右に廻れば般の箕子陵あり其に當時の俤を偲ばしめた、日露の役に兩斥候の第一衝突せしと聞く七星門に來たらし頃、日は全く暮れ四隣寂として聲なく松の梢を渡る風は昔を物語る如く、丘を下れば獨り路傍の蛙聲を驚然たりであつた。

此處で赤毛布を演じたのは且那さん、あちから泊りですかと、いはれ私は平壤は始めてだからあなたをよく知つて居るだらうから何處かい、處へ引張つて行つてくれいふと車夫は心得たりと、それでは柳屋へ案内致しましよか、そこは此邊ではいふ旅館ですからといふのでウム夫れじやそこへ……轎を下したは平壤一番の柳屋支關前、成程大きい立派である見れば六尺巾の階段の真中には毛氈が敷かれ真鍮の金具は眩いばかりに光つて居る。こんな高等旅館へ宿るつもりじやなかつたかと思つた時は遅い、車夫はしきりに鈴をならして案内を乞ふた。

女中に導かると、二階の十番へ通つた。やがて茶が運ばれた、併し他の旅館とはちがふ、禮儀作法正しく本式に持つて来るけれど、此方は山猿そんな七面倒くさい事は知らん手首より先の真黒い手にて茶腕を握り一息にのみ乾してしまつた。

次には宿帳が持つて来られた、そんな連中が泊つて居るだらうかと取り上げて見ると陸軍大佐何某、法學博士何某、何々銀行員何々會社員、何々技師と肩書の陳列場である。

自分も技師はさておき疑師なりとも書きたいが、山奥から出て来た卵で光つて居る詰襟の洋服ではそれも出来ず、正直にかき終ると其所へ女中が赤い一かん張りの箱を持つて来て差出すので硯箱ですか僕は今萬年筆をかきましたといふと、いわぬ之を御覽なすつてといふので浦島太郎が玉手箱を開く様にをさるる蓋を開けて見ると数枚のカードに、宿泊料が書いてあつた、一泊料二圓五拾錢、食料一圓とある女中が前に居るので体裁が悪いが、一枚取り出して見ると宿泊料二圓、四圓、五圓、食料もそれ相當の階級に分たれて居る。

今更飛び出す譯にも行かず其夜は其處に宿つて朝は四時發の一番列車にて出發したが夕飯を食べたのみにて大まき五圓を絞られたのである恥も不顧一寸此處に赤毛布を記して見た。

△病院生活

茲に旅行も終へて七月十三日歸廠し翌日安東縣滿鐵病院に赴き診察を受けしに「梅毒」と斷定され入院治療の止むなきに至り手術後七週間の日子を要すといふ宣告の下に病院生活といふメラソリーライフを送る段取となつた次第である。

病院は俗に浮世の地獄と云はれ廊下を通るものを見れば皆顔色蒼然として肉落ちしかめ面して頭や手脚に繻帯をして居るものや腕を切斷せしもの或は四目杖をたより片足にて跳るもの或は擔架にて運ばれるもの或は氷嚢を吊して床中に喘息するもの或は悲鳴をあげて呻吟するものあり見るかに一つとして耳目を蔽はしめざるものはない室内には沃度ホルムやカンフル丁幾の藥臭が漲つて居て誰しも一度此の中に入れば精神状態が變るのである。

病氣する程つまらぬことはない痛い苦しいせつない恐しい、いやなめをして苦しい物や不味なものを食べた揚句に財布迄も絞られて瘠せるかんと何と莫迦げた事だらう。此様に感じれば實際健康は人生幸福の一要素である。

入院前體重拾五貫四百匁であつたが手術後一週間は卵一ケ牛乳一滴も口に入れるを許されず只オモノを一瓶宛て命を繋ぎそれ以後六週間即ち退院の日迄漸をすゝせられたので目には此の奥にありと立札を要する様になつ十三貫といふ骨皮の身を提げて退院した。

よく人はいふ「寝る程樂な事はない」と然るに此れは勞働後の疲勞したる時に於て味ひ得る事に於てばかり居るといふ事は一寸考へると非常に樂の様に見えるが、かうして毎日天井ばかり睨んで居る事は随分苦しい、况んや炎熱焼くが如き此の夏の日に於てをやである。

病院の窓から眺める月は影が薄い今夜も空はよく晴れて清くさへた夏の月が硝子窓を透して淡い光を真白いベットの上に投げる時明月を賞する軒場にすた秋蛭のメロデーに耳を傾ければこれも悲哀に感ぜられ淋しく、かゝる異國の空に病める私はさう寂寥の感にうたれる!

八月の二日より一晝夜斷食され其上下劑を服させられ三日の朝は瀉腸に引き續き洗腸され仰向きにされ、はらばいにされて尻の毛を悉皆剃られ肛門鏡を突き込まれるやら全く彼の歐洲の大戦亂よりは僕の尻の穴の方が劇しい、次ぎには手術台上り兩脚は革紐にてしめ着けられ兩手は左右より看護婦に握られ顔は濕布にて覆はれ度生鯉か鶏が俎の上で出刃庖丁の御見舞を受ける時の様な格好で魔睡劑を仰ぎ看護婦の數ふる通り一ツ二ツ三ツ……

……三……十五……三……ロークウー……

サンジューセ……

(完)

大正六年九月十一日夜赤い煉瓦で築かれた鴨綠河畔の滿鐵病院第二病棟第十一號室の寢台の上にて支那芝居の笛の音を聞きつゝこの稿を草したる

【附】

終りに臨み我親愛なる校友諸兄の御健康と並に御發展を祈る

御承知の通り朝鮮の總面積約一萬五千方里凡九州の五倍にして此の人口約一千五百六十餘萬と見て北海道の六七倍ある然るに最近の調査によれば朝鮮に在住する内地人の總人口約三十餘萬ある男子十五萬六千餘人女子十三萬五千餘人此男女比較は男子十に對する女子八、八の割合であつて之を内地に於ける男子十に對する女子九、八の割合に比すれば女子の少き事一、一を示して居る。

前にも述べし通り京城は朝鮮の首府と雖も人口僅かに三十餘萬にすぎず第二の都會と稱する平壤は四五萬これにつぐ大邱が二三萬餘は一道の首邑でも一萬を下つて居るといふ有様ではまだ移民の餘地はいくらもある。

今や海外發展の聲高き秋に當り飄つて現今の青年諸氏を見るに徒らに猫額大の天地に醜態して曰く煩悶曰く生活難曰く悲慘曰く何々と稱して醉生夢死の裡に甘んせんぞと汗!!

郷等は刻下世界の趨勢を如何と見るに起てよ校友滿鮮の地や廣し男子埋骨萬里異境の地須らく此の氣概なかるべからず猫額大の天地に踟躕し犂牛角上に錮銖を争ふを止めよ南洋に滿蒙に豊饒無盡の處女地は勇敢なる開拓者を待てるにあらざるや夫れ奮起せよ

祝大正六年十月一日朝鮮總督府治政七週年記念日

文苑

五年の後に

五年の後に  
 際の黄色な小鳥は大正二年の三月三十餘名の人達とあわたましい心で巢立をした。初めて辞令と云ふ嚴めしむものを手に握つて小川の山で一本立ちの足固めをしたのは五月の半頃であつたと思ふ。

何百と云ふ恐ろしき人夫達を監督しなければならぬかと思ふと私の弱心は何處となく不安であつた。慣れて見ると恐ろしかつた人夫達は頗る無邪氣なものであつた。貧弱な腰辨も官員様と呼ばれてあぶない自尊心が萌して来た。其頃私の一番恐ろしかつたものは字と算盤だつた。字と算盤が上手だつたら他のものは何も入らない様に考へられた。冬の寒い日に大川狩で偶然H兄に會ふて焚火の傍で同窓の噂をした事もあつた。

二年の伐木生活をしてゐる中に大分社會と云ふ流れに浸されて若いものゝ行きたがる道も幾分踏んだ。徴兵検査の時にはH、I、の二兄と痛飲して二年ぶりの友情を温めた。其時H兄の鼻下には漆黒の鬚があつた様に覺れてゐる。其年の秋飄然私は東上した。鳥打帽に草履穿きの身體に都の風は薄寒かつた。

兄

た湯ではつたり一語になつた、下宿も近所だつた、二人でよく遊んで歩いた。今は

農大にゐる。

農大にゐる。  
 之も淺草の支那料理で一諸にあつたんだが私の方では氣がつかなくなつた、それもその筈あの纖弱な君がズット身体が伸びてソフトにインパネス頭は中央から奇麗に右左りと云ふのなもの、確か東京大林區に居られるだらう、然し其時滿洲とがへ行くこと云ふ話もあつたが。

I 兄  
 再び、入營の途次秋田から立寄つた、丁度御大典の頃だつたので一諸になつて浮かれて歩いた。二三日私の下宿に泊つて居て新宿に見送つた時今度は何時會へるだらうと云つたがそれきり一度も會へぬ。除隊後又秋田へ歸つた。

大正五年の春私は九州の南端迄漂流する身となつた。もうそれからは昔のクラスメイトには誰れにも會はぬ。而して二年の月日が又流れた。四國のS兄澁谷のN兄秋田のT兄日立のH兄とは時々文通してゐる。S兄は奥様が出来ぬ由目出度い事である。而して今度は日向へ來られた由、事に依れば面會の出来る時もあるらう。

指を折つて見ると丁度今年で全五年とある。私も來年は人生の半に達するのだ。

鹿兒島は暖かい國である、靜かな錦江の波を越えて薄紫の櫻島からは、軟かい水蒸氣が立昇つて、大正三年の噴火は知らぬ様に落つてゐる。本丸跡の石垣には十年過

争當時の彈痕が残つて、今は七高造士館となつてゐる。城山の松風や西郷翁の墳墓の地や昔を偲ぶ材料も多い。然し文明の潮の浸入と共に昔の薩摩武士の偉は次第に少くなつて行くのは悲しい事である。市中の目貫を貫く電車もあれば、三越式のデパートメントストアの立派なものも出来た。言葉も次第に普通語化せられて行くけれども未だ、之れ丈は悔り難い勢力がある、來た當時は一寸も分らずに頗るまごついた、今でも日常の買物なんかには少しの不便も無いけれども、田舎へでも旅行すると全く分らぬ事がある。之等は追々御紹介致すこととする。

鹿兒島の春は今正に酣、花と云ふ花は皆咲いた感がある、  
(雨の音、蛙の鳴く音を聞きながら  
大七、三、二九、夜九時稿)

人の道

山梨鐵道にて 渡邊生

余は此處に人の道と題すれども、余の信仰を記すに外ならず主張するに外ならず、余は諸兄の説を尊敬す余の説も寛容せられん事を望む。  
人は宇宙に存する理性を享けて理性とあし原理を取りて原理となす、人の道は總て宇宙より來り宇宙より承く、然らば人の道は宇宙に問はざるべからず、宇宙に従はざるべからざるなり。宇宙に問ひ宇宙に従はん

には宇宙を學ばざるべからず。之を學び之に問ひ之に従ひ、宇宙と一体に歸するは是れ人の道たるに非らざるか、人の向上には非らざるか、眞正の倫理道徳には非らざるか、夫れ人の道は宇宙の道なり。

宇宙は事實の上に大理想大倫理を啓示せり此宇宙の大理想大倫理の啓示を明白に知り之に従ふものは聖なり。人は孔子釋迦耶穌を稱して三聖とす、是等は皆宗教の教祖あり、是等の人々の性格が果して今人の信するが如きものならば其偉大なるに於て千載に卓越す、蓋し其教旨の今尚朽ちざる者は一は之に因らん。未來と雖も人が偉大なる性格と尊敬する限りは此人々は感化力を永續するを得べし、教旨は朽ちざるを得べし然れども此人々は宗教の専有者には非らず倫理道徳の理想として世界思想界の共有たるべきものなり。人宇宙の無窮無限に對し靜に思ふ所あらば誰か深く畏敬の心を生ぜざらんや。顧みて己を觀、如何にして我なるものはあるやと思ひ又如何にして我の此世に來りたるを思ひ、更に我が力の能く何事をなし得るやを思はば、又誰か自己の卑小を感ぜざるを得んや是眞の道徳心なり宗教心なり。

故に人は人に問ひて天の語を求む、天に口を、天に語あらず唯思の切なるが爲に自己の心之を語る、之即ち思ふ天の聲あり。然れ共天の意味は萬象の上にあるあり、萬象即ち天の道さればなり之を天の語とせざ

幸田氏の全氣全念を讀みて

鈴木静夫

自分此れを讀んで尤も感じた、事實物事は全氣全念でなければならぬ、彼の禪なども唯坐つてゐる時は禪で無く起つても禪坐るも禪、小便をするのさへも禪である。で斯様に物事は如何にすまらぬ事でも全氣全念でやらなければならぬ、我々日常の總ての行爲、即朝起きたり飯を食つたり、本を讀んだり小便をしたる、皆全氣全念でやらなければならぬ、就中飯を食ふのなどは最も全氣全念でやらなければいけない、世の中の人々が唯あくせくと働いて居るのもこの飯を得んが爲、食はんが爲であるのだ、所がどうしたものが好い加減の齡をして下駄をぬぐに片々三尺もはあらかしたり、四角を座敷を丸く掃く様な者が居るからいやややどうも困つたものだ、こゝにいふ者に限つてそう大した出世をしない。

或人の話に尾籠な事であるが、便所を去るに樂書してあるが、あれは便所の中で閑たからあつたのだと云ふ。之はまことに不心得な事である、一方で用を達しかがら一方で樂書するなんて馬鹿な事はない、昔からよくあの便所の中で殺された者があるが、あれは前の樂書をする連中と一しよで全氣全念で糞をしあつた報であらう、とにかく

れば天の語は遂に聞く事を得ず。道理は天の語に非らざるか、苟も道理の文章に存するあれば之を理性の表現と云はざるべからず、理性の表現は或る意味に於て言語あるに非らずや。  
理性は唯理性にのみ解せらる、故に天の語は理性を以て聞くを得べし。人は神に祈禱すべきか、然り。然れども祈禱の爲に宇宙の物質的關係を一毫たりとも變じ得る事を得ず、神は唯心靈の窓に射映す、祈禱は我自觀の上に大自觀を明らからしむ。  
神は誠心は祈禱するもの、心靈力を與ふ。向上は茲にあり、疑ふ勿れ迷ふ勿れ心靈に力を得るは力の上に力を得るあり、是れ天啓の倫理なり、理想なり、人の道なり。

寮舎日記

星波生

三月六日、故郷なら椿が濃緑の葉蔭に色着く日、雪かしらと思つたが晝頃から碧空がのぞく。水：水：水：水：幾月か待つた水が今日始めて水道に。  
三月八日、後期試験開始、雪は中々消ない、夕陽に映する駒ヶ嶽の景は又とない。  
三月十六日、試験了る、攪亂された頭腦、疲勞した體、羨ましいは春風。  
三月二十一日、愈試験發表、見まいとする心と見ようとする心が争ふ。  
春れた空、輝く春光、翻る國旗。  
三月二十二日、卒業生の送別會、風が強い中庭の裸木が動く、夕方から吹雪、

く人間などは、ともすると横着になり易いものであるから大いに努力してより以上の結果を得る様にしなければならぬ、四角な座敷を丸く掃いてはいかぬと云ふが我々は全氣全念を以つて此の丸を四角の外にたく様に心がけねばならぬ、世の中にはつまらぬ事も出來ぬ癖に威張つて居る者がよくあるが、あつた奴をつかまへて來て木曾川へでも投込んだならば『助けて』とか何んぞか我鳴るにちがいない、そうしてたよばずながらも手足を動かすだらう、之が此の世の中に於て眞實實際厘毛の掛値なしの全氣全念の行爲動作である。もしも我が國の人々上は、至尊陛下より大臣大将、下は車夫走卒其日暮しの者までが己の動作行爲悉く全氣全念で行つたならば必ず我が國が世界の一等國なる事疑なしである、尤も乞食や泥棒に全氣全念でやられてはたまらぬ、しかしながら之は甚だむづかしい事であるから我々が先づ自分から自己を改造して行かればならぬ、此の努力論を以て我々の修身に非常に良い本であるが今の青年、學生の多くは、くだらぬ小説本や不要な眼鏡を買つて得々としてゐる者があるが、自分にはあつたやからの心理は一寸わかりかねる。  
要するに我々は當面の問題として、つまらぬ事から全氣全念で行ひこゝに一つの進境を見出す事が肝要である。

學校便り

卒業式、三月廿三日午前十時より第十五回卒業證書授與式を舉行、國歌合唱、勸語奉讀、學事報告、證書授與、賞状授與、校長訓辭、知事告辭、來賓祝辭、在校生送辭、卒業生答辭の順序にて滞なく閉式せり。

天下森林多シト雖モ木會ノ美林ニ若クハナシ深山幽谷皆然リ茲ニ山林學校ノ發達セル元ヨリ其處ニシテ近來入學生ノ増加著シク卒業生ノ聲價一段ノ高キヲ致セル蓋シ時勢ノ然ラシムル所ナルモ又實ニ據ル所アリト謂フベシ。

本日木會山林學校第十五回卒業證書授與式ヲ舉行セラル、ニ方リ不肖招カレテ此式ニ列スルヲ得タルハ光榮何者カ之ニ加ヘシ惟フニ本邦林業ノ最近狀態ハ日ニ就リ月ニ進ミ森林ノ富盛復昔日ノ比ニアラズ而シテ其衝ニ當ルモノ必ズ先ツ之ニ必要ナル學識經驗ヲ具有セザル可カラズ。

祝辭 本日木會山林學校第十五回卒業證書授與式ヲ舉行セラル、ニ方リ不肖招カレテ此式ニ列スルヲ得タルハ光榮何者カ之ニ加ヘシ惟フニ本邦林業ノ最近狀態ハ日ニ就リ月ニ進ミ森林ノ富盛復昔日ノ比ニアラズ而シテ其衝ニ當ルモノ必ズ先ツ之ニ必要ナル學識經驗ヲ具有セザル可カラズ。

大ニ其成功ヲ賀スルモノナリ然リト雖モ吾等之ヲ聞ク學校ニ於テ修了セル學科ハ只僅カニ其發端ノミ入門ノミ而シテ活社會ニ出デ、遭遇スル事件ハ復雜多端ヲ極メ殆ド應接ニ遑アラズト此ニ於テカ卒業後ノ修養ノ益々緊要ナルヲ見ルナリ。

辭ヲ始メ校長先生並ニ來賓各位ノ懇切ナル訓辭並ニ祝辭ヲ賜ハリ且在校生諸君ノ感謝ナル送辭ヲ忝ウス生等感激ノ至ニ堪ヘズ。

- 皆勤、精勤生左の如し
北川 春 細窪友一郎 下島俊二
志津幸祐 加藤七藏
杉山義次 井上寛一 日野櫻亮
佐塚甲子 小松義三 篠原將英
福川正三 野本美嘉 古畑要司
大木多喜雄 富士川金二 征矢三郎
佐藤誠一 吉澤豊一 大久保幸福
村上道信 吉田正男 八木恩藏
水口 久 木村榮一 深澤佐愛
岡西萬秋 西村清志 野口 勇
立道乙松 塚田繁次郎 霞上正次郎
吉村幸助 田中 一星 重男
木下 清 (以上本學年精勤者)
内山伊那登 星加正雄 和田實也
矢島 稔 佐藤 坦 山崎多門
水野鎌一郎 向井一男 中越三郎
瀧 美雄 鈴木靜夫 早川嘉一

禽ハ幽谷ヲ出テ、東野ノ霞ニ咽ビ春ハ梅花ニ入りテ南枝ノ蕾漸ク綻ビントシ天ニ榮光充テ地ニハ喜悅溢レヌ嗚呼本日ハ如何ナル吉日ジヤ生等三十八名ノ爲ニ卒業證書授與ノ盛典ヲ舉行セラレ知事閣下並ニ來賓各位ノ臨場ヲ忝ウシ知事閣下ノ告

答 辭
禽ハ幽谷ヲ出テ、東野ノ霞ニ咽ビ春ハ梅花ニ入りテ南枝ノ蕾漸ク綻ビントシ天ニ榮光充テ地ニハ喜悅溢レヌ嗚呼本日ハ如何ナル吉日ジヤ生等三十八名ノ爲ニ卒業證書授與ノ盛典ヲ舉行セラレ知事閣下並ニ來賓各位ノ臨場ヲ忝ウシ知事閣下ノ告

謝恩會、送別會、式後卒業生ノ紀念撮影あり夫より校友會を開きて別を惜み終て卒業生は職員一同を招待して茶菓を饗し謝恩の意を表せり
始業式、四月一日午前九時より講堂に於て舉行、校長より校規の嚴守に就て訓諭する所あり尙學校備品の取扱等に就きて注意

せられたり  
○入學試験、本校入學試験は本年度より四月一日と變更せられ全日は午前九時より開始午後三時半終了せり、志願者總數八十二名の中本校にて受験せるもの二十名郡市他府縣にて受験せるもの五十六名なり  
○入學式、試験の結果入學を許可されたるもの左記五十六名に對し四月十三日午前十時より講堂に於て入學式舉行、國歌合唱、勅語奉讀、校長式辭、在校生總代(米久保春雄)の迎辭、入學生總代(村松二郎)の宣誓の辭、父兄總代(森田長次郎氏)の謝辭ありて閉式せり  
入學生氏名及原籍(成績順)  
靜岡縣 村松 一郎  
西筑摩縣 藤井 井 弘  
全上 井 乙 利 夫  
岐阜縣 上 井 乙 之 助 夫  
兵庫縣 小林 敏 三 郎  
山梨縣 高野 和 夫  
西筑摩縣 松原 松 男  
南安曇 西 牧 巧  
山梨縣 中 島 省 三  
岐阜縣 荒 木 要  
西筑摩縣 本 南 克 己  
山形縣 今 野 啓 藏  
小縣郡 三 井 房 次  
下伊那郡 木 下 文 夫  
西筑摩縣 上 田 文 夫

下伊那 石原 今 男  
岐阜縣 高木 萬 平  
全上 藤井 逸 郎  
西筑摩縣 森田 幸 太郎  
岐阜縣 長谷川 要 治  
全上 渡邊 時 夫  
西筑摩縣 山下 尙  
岐阜縣 中島 爲 七  
下伊那 片桐 英 雄  
南佐久 柳澤 虎 三  
高知縣 大原 猛 志  
新潟縣 池主 鐵 治  
石川縣 宮城 吉 雄  
岐阜縣 安江 銳 太 郎  
西筑摩縣 長谷川 都 郎  
石川縣 安地 又 四 郎  
岐阜縣 安江 貞 夫  
西筑摩縣 片原 祐 一  
東筑摩縣 伊藤 藤 傳  
岐阜縣 熊崎 代 治  
山梨縣 小林 俊 三  
西筑摩縣 三木 正 敏  
全上 澤頭 謹 一  
北安曇 山崎 高 男  
西筑摩縣 唐澤 松 男  
新潟縣 小 林 之  
山梨縣 數野 二 郎  
全上 保坂 都 起 郎  
岐阜縣 高木 榮 一  
三重縣 筒井 正 夫

愛知縣 藤田 喜 一  
東筑摩縣 中田 基 好  
岐阜縣 岡崎 早 苗  
愛知縣 前田 裕 道  
岐阜縣 奥村 裕 道  
福島縣 兼子 熊 慶  
山梨縣 深山 兵 重  
岐阜縣 林 千 代 造  
東筑摩縣 池上 柳 三  
石川縣 寺賀 仁 三 郎  
○級長任命、二、三學年級長、副級長左の通り任命せられたり  
三學年 級長 米久保春雄  
副級長 佐塚 甲子  
二學年 級長 高橋 秀 惣  
副級長 米 倉 巧  
○辭令、内藤教授囑託は一身上の都合により三月限教授囑託を辭せられ、飯島教授は病氣の故を以て四月九日退職せられたり  
小貫教師は今回武術教師(年手當三十二圓)を命せられたり  
○實習、四月二日より直ちに實習に着手せるが本年度春期實習の豫定左の如し  
一、苗圃ノ播種及床替事業 約二千坪  
一、造林地ノ新植及補植事業 約四町五反歩  
一、農作物ノ仕付 約一千坪  
一、植物園及庭木ノ手入れ 約四百坪  
一、落葉松林内ノ手入れ 約三町歩

校友會便り

○役員任命、本年度校友會役員は左の如く任命せられたり

- 庶務 部長 米久保春雄 副部長 篠原將英 副部長 鷹見勳
- 雜誌 部長 大坪時治 副部長 井原邦雄 副部長 佐塚甲子
- 辯論 部長 吉澤豊一 副部長 丸山林一 副部長 小野澤四郎
- 庭球 部長 佐藤誠一 副部長 野本美嘉 副部長 坂卷利一
- 弓術 部長 青木忠太 副部長 米山芳郎 副部長 伊東近良
- 遠足 部長 青木忠太 副部長 米山芳郎 副部長 伊東近良
- 柔道 部長 伊東近良 副部長 星加晴雄

會員消息

○伊藤喜代君、二月末、大阪府豊能郡立農學校助教諭として赴任せらる  
○種倉隨藏君、伊藤喜代君に代りて本縣林務課に入り北安曇郡駐在(月俸二十圓)となる  
○佐藤一郎君、今回南安曇郡駐在林業技手(月俸二十五圓)に任せらる  
○中村五郎君、本縣林業技手(月俸二十圓)に任せらる

本年卒業生就職地

○飯沼要人君、高崎小林區に於て出張中負傷し静養の爲歸郷四月十八日母校を訪問せらる  
○飯沼要人君、高崎小林區に於て出張中負傷し静養の爲歸郷四月十八日母校を訪問せらる  
○有賀正一君、高松小林區署へ轉任せらる  
○榎原武重君、西條小林區署へ轉任せらる  
○佐々木久一君、久留里小林區署を辭して歸郷せらる  
○飯沼要人君、高崎小林區に於て出張中負傷し静養の爲歸郷四月十八日母校を訪問せらる  
○飯沼要人君、高崎小林區に於て出張中負傷し静養の爲歸郷四月十八日母校を訪問せらる  
○有賀正一君、高松小林區署へ轉任せらる  
○榎原武重君、西條小林區署へ轉任せらる  
○佐々木久一君、久留里小林區署を辭して歸郷せらる

林友代前納者氏名

東京大林區上田小林區署 内田新之助  
朝鮮總督府山林課 星加正雄  
熊本大林區長崎小林區署 横井正守  
臺灣總督府營林局 下平三雄  
全上 瀧澤銀次郎  
全上 木下武夫  
北海道王子製紙會社苫小牧分社 西尾 彰  
岩手縣廳山林課 池口 福 雄  
片倉組 下島 俊 二  
群馬縣廳山林課 梶田 實 治  
足尾銅山 井上 寬 一  
高知大林區署 原川 只 一  
秋田大林區早口小林區署 月田喜代佐  
東京大林區沼田小林區署 志津 幸 祐  
大坂大林組製材所 伊藤 芳 郎  
北海道王子製紙會社苫小牧分社 原 正 次  
東京大林區沼田小林區署 大久保猪三郎  
全上 和田 實 也

金壹圓五拾錢 内山伊那登君  
金壹圓五拾錢 小林 右 内君  
金壹圓五拾錢 大久保猪三郎君  
金壹圓五拾錢 伊 東 厚君  
金壹圓五拾錢 木下 武 雄君  
金壹圓五拾錢 内田新之助君  
金壹圓五拾錢 唐澤 繁 雄君  
金壹圓五拾錢 星加 正 雄君

- 金壹圓五拾錢 原川 只一君
- 金壹圓五拾錢 今井 徹郎君
- 金壹圓五拾錢 近森 良材君
- 金壹圓五拾錢 渡邊 隆知君
- 金壹圓五拾錢 矢崎 清海君
- 金壹圓五拾錢 細窪 友一郎君
- 金壹圓五拾錢 下平 三雄君
- 金壹圓五拾錢 井上 寛一君
- 金壹圓五拾錢 島田 德之助君
- 金壹圓五拾錢 今井 忠雄君
- 金壹圓五拾錢 古根 勳君
- 金壹圓五拾錢 日野 櫻亮君
- 金壹圓五拾錢 月田 喜代佐君
- 金壹圓五拾錢 三村 善三君
- 金壹圓五拾錢 瀧澤 銀次郎君
- 金壹圓五拾錢 梶田 實治君
- 金壹圓五拾錢 横井 正守君
- 金壹圓五拾錢 松尾 廣次君
- 金壹圓五拾錢 廣瀬 運平君
- 金壹圓五拾錢 北川 春君
- 金壹圓五拾錢 池口 福雄君

謝恩金申込報告

金五十錢(征矢野書記へ) 野見山 定雄 (舊姓福澤)

金壹圓(大場教諭へ) 全 人  
金五十錢(加藤書記へ) 全 人  
金壹圓(福山教諭へ) 全 人

○先月贈呈せる謝恩金に對し禮狀を寄せられたる向左の如し

(征矢野書記より)

謹啓益々御清邁奉賀候今回は多大の金圓御惠送被下正に拜受仕候就而は適當の物品に代へ永く御芳志を記念可仕考に御座候間御芳名の諸賢へ宜しく御傳達被成下度願上候 敬具  
大正七年三月廿八日 征矢野 茂樹  
木曾山林學校々友會御中

(大場教諭より)  
一、謝恩金拾七圓六拾錢  
一、芳名簿 一冊

右御送附被下正に拜受仕候何れ一々改め御禮申上べく候へ共不取敢御受の挨拶まで如此に御座候 早々  
大正七年三月廿日 大場 慎六  
(福山教諭より)

拜啓各位益々御多祥の段賀上候陳者今回は思ひも寄らざる謝恩金並に芳名録御送付に預り難有拜受仕候該金は何か品物に代へ永く御芳志を記念致度考に有之候間右諸君へ可然御傳達被成下度偏に願上候 拜具  
大正七年三月廿一日 福山 也

第十七回運動會決算

一、金百四拾七圓拾錢也 寄附金總額  
一、金百參拾貳圓五錢五厘也 總支出額

内 譯

○金九圓拾九錢貳厘 庶務部  
○金四拾四圓六拾貳錢五厘 接待部  
○金拾參圓壹錢參厘 裝飾部

會報部 金八圓六拾四錢  
借物部 金四圓拾貳錢  
樂隊部 金壹圓七拾八錢  
賞品部 金參拾壹圓壹錢  
競技審判部 金拾九圓六拾七錢五厘  
外三收入金貳圓貳拾八錢五厘

賞品殘賣上高 梯子 損料  
支大金壹圓  
全上金參圓  
差引殘金拾參圓參拾參錢  
免狩費補助

一雨過ぎ去つて紫雲霞靄し、千樹萬朶の櫻漸く妍を競はんとするの折から、我校友會諸兄には益々御清康の趣衷心欣喜に堪へざる處に御座候。扔生等今回茲に先輩諸兄の後を受け本誌編輯の重任に當る事と相成候。不材不肖素より主義に何等の雄大清新なく筆に何等の活氣精采なき身、今更乍ら省みて轉た慚愧の至りに耐へず候。先輩諸兄幸に此黃嘴乳臭生等が非才を憫まれ本誌に對して舊に倍し、御指導御援助の下に金編玉稿を兩下せられん事を偏に相願ひ、併せて折々御鞭撻御叱正に預り益々不肖等發奮の資を得たく切に希望仕候

部長 鷹 見 勳  
副部長 太 坪 時 治

定價金參錢